

004 TICA

題名	作者	コメント	評価
クロスロード (角川文庫)	鎌田敏夫	うさおさんお気に入りの本。高校の同級生9人が卒業して6年経って友人のお通夜の席で再会し、24歳からの10年間、年に一度だけ橋の上で逢う事を約束する。グループの中で恋愛関係が出来ることや、一人死んじゃうところなんか『愛という名のもとに』のような感じ。	『愛という名のもとに』は、主題歌も挿入歌も素敵だと思います、へへっ(^.^)v ☆☆☆
犯人に告ぐ (双葉社)	雫井脩介	この人は初めて読んだ。面白かった。主役の巻島がかっこいい。頭がよくて、信念にまっすぐでそれでいてアウトローな刑事と来てる。警察内部でも敵と味方がはっきりしていて、その扱いは気持ちがいい。ふたつの連続殺人事件が起こるが、犯人捜しよりも巻島のキャラクターだけで十分読ませる。巻島を閑職に追いやることになった事件の犯人が捕まらないで終わるといふ珍しい展開。最後の事件では巻島の情の部分、捜査への思いがわかるが、慌しい感じがした。もし映画化になるなら、トヨエツかなって思う私も芸がない？ただ巻島は、若いおじいちゃん。孫を可愛がるトヨエツは見たくない。	巻島のあだ名が「ヤングマン」ってのが警察の野暮ったさ。あんたは、♪ワイエムシ、エイ かい(一一) ☆☆☆☆★
虚貌 —上下巻— (幻冬社文庫)	雫井脩介	事件が残酷で犯人には同情の余地もなく興味がもてず入りにくい話だったのが、一人の刑事が出てきたとたん俄然面白くなった。上巻でこっそり自画自賛した見事な推理は、下巻の最初でばらしてあった^_^; まるで違う世界の話をオチにしての終末への向かい方は、あまり馴染まない。最後にはもうちょっと刑事さんを幸せにしてほしかった。…と書いてからこの話がドラマになったのでみてみた。はっきり言ってひどかった。おおまかなところだけもらって別な話に仕立てたって感じ。底が浅すぎ。確かに刑事さんを幸せにしてほしかったって書いたよ、だけどあれじゃあんまりだああ〜！なんで雫井脩介がここまで話を変えられて許したのか不思議。	上巻は推理小説。下巻ではタイトルの意味が解かる。 ☆☆☆☆★

<p>火の粉 (幻冬社文庫)</p>	<p>雫井脩介</p>	<p>元裁判官の家の隣に以前無罪判決を下した男が引っ越してきてから家族に亀裂が入っていく。その家の長男の妻が中心になって、男を追いかける。賢くてまっすぐな行動力のある人で、そのイメージが由佳ちゃんを思い起こさせた。 雫井脩介を3冊続けて読んだうち、これが一番読み出したら止まらなかった。緊張感があって映画(『ダイハード』あたり)をみてるようだった。こりゃ映画化されるなと思ったら、すでにTV化になってた(>_<)</p>	<p>男より女の方が毅然としてる。内田裕也とキキキリンみたい。(ちょうどワイドショーでこの夫婦をやったもんで^_^;) ☆☆☆☆</p>
<p>生首に 聞いてみる (角川書店)</p>	<p>法月綸太郎</p>	<p>狭い人間関係の中で起こる殺人事件。主人公と警視が親子という設定。浅見光彦にだってお兄さんはあんなに捜査の内容をもらしてない。江知佳って名前に意味があるのかと思ったら、なんにもなかった。それで愛称が「えっちゃん」って一体…</p>	<p>2005年の『このミス』大賞作品。なんちゃ、この題名は。 ☆</p>
<p>愚か者 死すべし (早川書房)</p>	<p>原奈</p>	<p>ヤクザが出てくる話は苦手。ハードボイルドにありがちな話し方も話し言葉も不自然で嫌い。前にも書いたけど、『なのだ』なんて使って話すのはバカボンのパパくらいなのだって。 『元旦の真夜中』なんて言葉を使う小説家の本はもう読まないな。</p>	<p>この題名もすごい。 ☆</p>
<p>パンドラ アイランド (徳間書店)</p>	<p>大沢在晶</p>	<p>人口1000人足らずの島に赴任した保安官が島の秘密を探り、連続殺人事件を解決する。上下二段組で厚い本のわりに、盛り上がり欠ける。</p>	<p>保安官と言っても西部劇じゃないよ。 ☆☆</p>
<p>キジムナーの 恋 (新風舎)</p>	<p>本明紅</p>	<p>沖縄のガジュマルの木に住む妖精キジムナーの話。他に、アルツハイマーを患ったおじいちゃんと孫の話の二編。</p>	<p>韓国の人が書いた韓国の話かと思った ☆☆</p>
<p>八月の獲物 (文芸春秋)</p>	<p>森純</p>	<p>10億円を3人にあげるって新聞記事を書いた老人をテレビ局が担ぎ出してー。思ったように殺人が起きて、思ったとおりの犯人だった。</p>	<p>サントリーミステリー大賞 ☆</p>

<p>夜の ピクニック (新潮社)</p>	<p>恩田陸</p>	<p>夜を徹して80kを歩く歩行祭という高校の行事の一夜のお話。同じクラスになってしまった異母兄弟の二人が主役。理想の高校生像がちょっとおもしろいので、こういう話は是非高校生の娘に読んでもらいたい。「夜ピク」って呼ばれている時点で高校生向きってことなんですけどね。</p>	<p>2005年 本屋大賞 恩田陸をずっと睦だと思ってたのは私です(恥…) ☆☆☆</p>
<p>九月が 永遠に続けば (新潮社)</p>	<p>沼田 まほかる</p>	<p>題名が好きでとつても読みたかった。でも題名とはイメージがまるで違い、どろどろした話だった。突然の息子の失踪。探し回る母親。父親の再婚相手の悲惨な過去。たいして好きでもないのに、若い男と付き合う母親の行動も、その母親を助ける親父の関西弁もひじょーにうっとーしかった。</p>	<p>ホラーサスペンス大賞 現実の関西の男の人は大好きです。 ☆</p>
<p>天国までの 100マイル (朝日文庫)</p>	<p>浅田次郎</p>	<p>嘘臭い風貌と純粹過ぎる話のギャップが浅田次郎嫌いになっている。ただこの話はドラマで見たことがあって好きだった。ドラマでは古尾谷雅人が魅力的な病院の先生役をやっていたのが印象的。『北の国から』のときも、トラックの運転手役がすごくよかった。でも自殺しちゃったんだよね。</p>	<p>☆☆☆</p>

『四日間の奇蹟』の次は『博士の愛した数式』も映画化になる。これがまたげっそりと癒し系コンビで博士が寺尾聡、おとなになったルートが純くん。芸がないっていうか、他にこの年のいい役者ってのはいないのかい？純くんは『四日間・・・』よりはあう。しかーし！寺尾聡はどうみても理数系の顔ぢゃないのさつ。

という話と関連なく…

雫井脩介の本の解説に「世間的認知は低すぎる」と書いてあったのに納得した。

浜省も認知度が低いと常日頃思ってるけど、これ以上人気が出るとライブには一生行かなくなるからまあいいか。ちなみに9月からのツアーのチケット取れません。(;<_<);。ウエ〜ッ

という話と関連なく…

6月11日の朝日新聞の一面の『文学賞異変』というタイトルの記事が面白かった。文学賞の創設がブームになっている。そのきっかけは『本屋大賞』の第一回受賞の『博士が愛した数式』が受賞後の売り上げを伸ばしたことらしい。書店の店員さんが運営しネットで投票する本屋大賞は、文学的なことがどーのというコメントよりも手作りのコメントを作り『面白かったから薦めたい』って気持ちが通じる身近さが受けているんじゃないかな。乱立ブームらしいのが『ラブストーリー大賞』の審査員に作家をはずし、大塚愛、成宮寛貴など異色のメンバーを揃えたこと。大塚愛だよ。ナリミヤだよ。芸能人を入れるなら太田光にしてほしい。

もともと芥川、直木賞は文芸春秋誌の売り上げが落ちる2月8月の販売促進のために菊池寛が発案したものだそうだけど、賞の乱立により販促効果は薄くなっているらしい。これだけ増えるとなんとか賞受賞って帯に書いてあっても、重みがなくなるもんね。

ちなみに賞金は『このミス』の1200万（『四日間の奇蹟』がこれとったのね。前回うさおさんが読んだ式田ティエンの『沈むさかな』はその回の優秀賞）から『メフィスト賞』の0円（乾くるみ、ね）まで幅広い。

『このミス』と『本屋大賞』はずっと参考にしたいと思ってたけど『このミス』一位が「生首・・・」かと残念な気持ち。2005年の本屋大賞は『夜のピクニック』で、『犯人に告ぐ』は同じ年の7位。私としては2冊なら『犯人・・・』が大賞だけど、これは投票する人の年齢の差かな。

